

第48回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール

文部科学大臣賞 作品

文部科学大臣賞

4年自由図書部門／読んだ本・じゅげむの夏

「じゅげむの夏」を読んで

愛媛県四国中央市立中曾根小学校 齋藤 花

夏休みに入っすぐ、弟が生まれました。生まれたての赤ちゃんは、小さくて、フニャフニャで、毎日色んな表情を見せてくれます。まだ外出ができないので、私も家で過ごすことが多く、宿題をしたり本を読んだりしています。赤ちゃんと過ごす夏休みは、楽しいけれど、ちょっとたいくつだなと思います。そんな夏休みに読んだこの本は、仲よしの少年四人が夏のめいっばい楽しお物語でした。本の表紙を見るだけで、夏のまぶしい日ざしを感じたり、セミの声まで聞こえてきたりするようで、とてもわくわくしました。

この本に出てくる少年四人は、私と同じ小学四年生です。心配性で気の小さいぼくと、ひょうきんでノリのよい山ちゃん、どんな所でもねころがるくせがあるシューちゃん、難病をかかえながらも明るくたくさんの夢を持って生きているかつちゃん、夏休みにやりたいことを宣言し、四人でいっしょに挑戦するお話です。

私が一番心にのこったのは、かつちゃんが集落にある天神橋から川に飛びこお挑戦でした。集落のこども達が代々受けついできたならわしで、三年生くらいまでにはみんなその儀式を行います。かつちゃんは、けがや病気をすると筋ジストロフィーの進行が早まってしまうと言われていて、川

に飛びこおなんでもってのほかなのに、

「ぼくも飛びたいんだよ。来年になったら飛べなくなるかもしれない。今年がラストチャンスって気がするんだよ。たのお。」と三人にお願いし、決行しました。病気があってもやりたいことをあきらめない心を持つているかつちゃんは、とても強いと思ったし、それをおうえんして一緒に成功させた三人の友達を想う気持ちが伝わってきて、私も心がドキドキしてうれしくなりました。かつちゃんが川に飛びこおのを成功できたのは、三人が助けてくれたからです。一人ではできないことをささえてくれる友達はすてきだと想いました。四人で川岸の岩にねころんで空を見上げた時、だれも何も言わなかったけれど、言葉がいらなくらいみんなの心が満たされていた、気持ち通じ合っていたのだと想います。私もそんな友達をつくりたいです。

この本を読んで、筋ジストロフィーという病気を初めて知りました。難病のひとつで、筋肉がだんだんやせて弱っていく病気です。立ったり歩いたり、物を持ち上げたり、生活するために必要な動きができなくなるだけでなく、進行すると、心ぞうや肺などの筋肉も弱っていくことで、こきゅうすることさえも難しくなるそうです。

かつちゃんも、ひっくり返るのではないかというくらい胸をつき出して体を左右にふって歩きます。三人の友達は、それがかつちゃんのかげません。どんなに歩くのがおそくても、かつちゃんはかつちゃんなのです。

村の山おくにある樹齢千年のおばけトチノキに行こうと言い出したのもかつちゃんでした。本を読んでいると、手押しの一輪車にかつちゃんを乗せ、三人が交代しながらがたばこの農道や急な坂道を進んでいくすがたが見えるように、四人と一緒に冒険しているように思えました。

四人は、村に住んでいるじいさんから「無我夢中で生きる。」と声をかけられました。やりたいこと、今この時にしかできないことに挑戦した四人は輝いていて、うらやましくなりました。私の今年の夏は、外出はできなかったけれど、赤ちゃんをだっこしたり、ミルクをのませたり、今しかできない経験をする事ができました。来年の夏はどんな自分になっていて、どんな今を生きていて、どんな夢を持っているかな。四人から教えてもらった今を生きることを大切に、やりたいことやワクワクすることに挑戦する夏にしたいです。